

# 努力次第で 乗り越えられる 目標を立てて

「野球と出会い、監督業から退いた今も野球が生きていく根幹をなす。」

野球部へ入ったのは中学3年の時。それまでは地理歴史部だったが、校内球技大会でたまたま満塁本塁打を打ったことから、野球部のキャプテンに「力を貸してくれないか」と誘われた。父は大反対で「成績を落とさない」という約束で許しを得た。都大会では春と、秋の準硬式大会で3位となり、高校1年の秋から4番を打つようになった。

立教の縦じまのユニホームに袖を通し、強打者として期待された。

大学でももちろん野球を続けたが、腰を痛めたのが転機になった。当時の芹沢利久監督から後輩の指導を任され、選手から指導者へ立場を変えた。指導した何人かの下級生がレギュラーになり、野球の面白さや深さ、コーチとしてのやりがいであらためて感じた。

社会人野球を経験したが、現役に見切りをつけたのが20代半ば。職探しをしているときに声を掛けてくれたのは大学の恩師だった野口定男教授と芹沢監督。「高校の教師になって野球をやるべきだ」と。自分を見ていてくれた2人の勧めを素直に受け入れた。

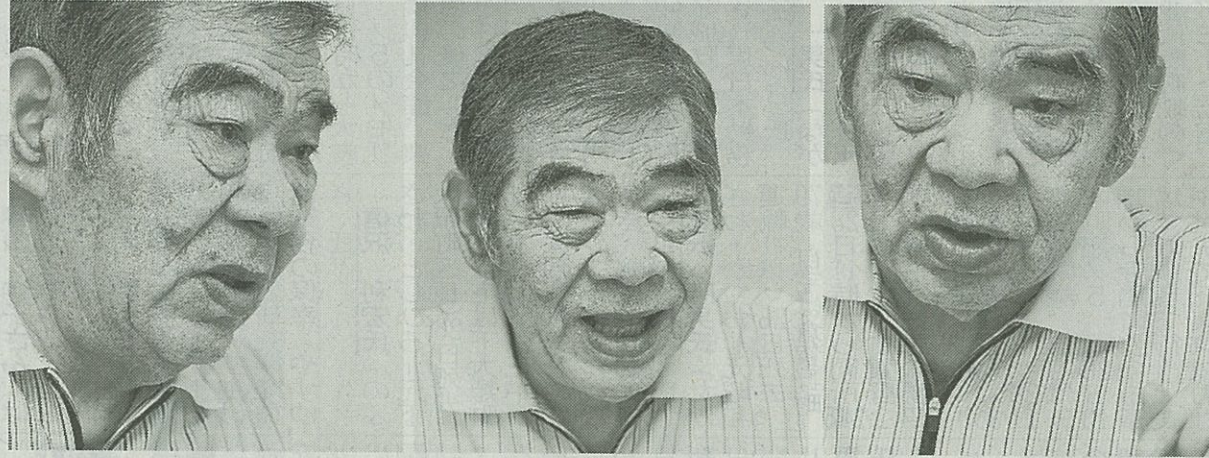
生まれ故郷は東京。後に母校・立大を率いることになるが、初任地として選んだのは農大二高だった。

沼田市出身の大学職員から農大二高が監督を探しているという噂を聞いた。「群馬に行けば桐生高がある。稲川東一郎監督がいる」。これだけで選択した。選手を育て、チームを甲子園に導くだけでなく、機動力を駆使した戦法を操る稲川さんと胸を合わせることで、そこから野球を学ぶことができるのではないかと考えた。

## 伝えたいこと

Message (1面からの続き)

### 元農大二高野球部監督 斎藤 章児氏



残念ながら、稲川さんは着任して間もない1967年の春の大会で亡くなってしまったが…。

春夏6回、甲子園に導いたが、夢舞台を踏むのは意外に難しかった。

目標が稲川さんから甲子園に変わり「勝つ野球」を求めたが、勝てなかった。自分では勝てないのか、甲子園に行けないのか。考え、悩んだ末の結論は「強いチームが勝つとは限らない。逆にもろさがあるて負けてしまう」。だから「負けない野球」を掲げた。

振り返ってみると、きっかけになったのは監督1年目の夏の北関東大会。県代表として出場し、あと1勝で甲子園だった。鹿沼農商(栃木)に0-1で敗れたが、この一戦があったから後の斎藤らしい野球ができるようになった気がする。

攻めるも守るも「1」にこだわる野球が始まった。甲子園がかなわず、何度か現場を離れ、スタンドから高校野球を見たり、大学

野球や他県の高校野球を見るようになり、それが采配を振るう肥やしになった。

「セーブに健大高崎と高崎が出場。健大高崎は初出場で4強入りし、関東大会も初制覇した。」

「不如人和(人の和にしかず)」という言葉がある。人の和に勝るものはない。野球ではチームワークが最も大切であるということ。

健大高崎は「不如人和」の野球を実践していて、まだまだ伸びしろがある。センバツ準決勝の大阪桐蔭戦。本来の攻撃型の走塁、相手投手のボールを見極め、バントを生かした揺さぶりなど、長身の投手に対し足元から崩していく積極的な仕掛けができていたから勝てた試合だ。

本県では、健大高崎に匹敵するライバル校の出現が望ましい。県大会を勝ち抜くのが厳しい状況が生まれれば、全体のレベルが上がる。健大高崎が全国レベルにあり、前橋育英や前橋商、桐生商といった力のあるチームがいるだけに、この夏は非常に楽しみだ。

年々、野球は進化している。高崎は心理学、統計学から戦術を練り、身体活動学などを基礎に野球を科学してはどうだろうか。2007年夏の甲子園を制した佐賀北は情報を収集、分析し、確率8割のデータを戦術に導入した。情報化は高校野球でも当たり前の時代。名門タカカならではの独自のインサイドベースボールを見てみたい。

高校野球の監督、指導者像はどうあるべきか。野球の指導者はある種の男のロマン。つらい所もあり、選手を育成する重い責任を担う。道は遠く報われ

## 野球指導は男のロマン

することは少ないが、値打ちのある仕事だと信じている。大切なのは指揮官の信念で、絶対にぶれないこと。幹が揺れたら枝葉はその何倍も揺れる。目的や方針を明確にすることだ。

高校野球では教員資格を持ち、教室で生徒を教えられる人が監督になるべきだと痛感する。教え子でいえば阿井英二郎。川越東の教員だが、甲子園に手が届くところにいる。プロを経験し、教員となった指導者がチームを甲子園に導けば意義あることだと思う。阿井は、ただ勝てば良いというだけの野球をやっていない。選手を育てる教育的な野球をやっている。

「次代を担う若者へ。この道は君が選んだ道果てしない遠い迷い道。全力を尽くして迷いたまえ」。野口教授から聞いた言葉だが、逃げずに正面からぶつかって悩んだ分だけ人は成長する。

子どもには「身心一如」といわれるように、練習で技を磨くということは同時に心と体も鍛錬されていることを伝えたい。心技体のうち、何が秀でているのではなく、心技体のバランスが保たれていれば、冷静に判断でき、試合で活躍できる選手になれる。

それにもう一つ、夢を持つこと。夢の実現のためにいくつか目標を立ててクリアしていく。ただし、達成できない目標ではなく、努力次第では乗り越えられる目標を立ててほしい。夢があるから頑張れるし、目標があるから努力できる。

高校野球では力のあるチームが勝つとは限らない。勝ったチームが強いのだ。だから高校野球は面白い。



### 取材余話

少年野球の指導中にグラウンドで倒れて2年余り。頸髄損傷による四肢まひからの回復を目指し、懸命にリハビリに打ち込む。本紙の高校野球解説コラム「斎藤章児の目」も昨年夏から再び筆を執る。一時は首から下が一切動かず、絶望感に浸ったが、病床でも高校野球の情報を集め、戦力分析を続けたという。インタビュー中に解説を始めた今センバツの健大高崎―大阪桐蔭戦。勝負どころを的確に捉えた視点に、野球への衰えない情熱を感じた。